



磯浜志 (三浜志)

泉 彦九郎 著

三浜志序

我常陸之地瀕海凡四十里其為聚落約八九十村 就中人物繁富者實以湊街為第一磯浜次之平磯次之 而三邑地勢蟬連世稱三浜 三浜中湊以河港磯浜以大洗景勝平磯以海浴場并頗為人所知 焉然謠俗朴陋文華未開 以故不以都會聞于世也 至藩主烈公初建學於湊名曰敬業館使儒生敷教於是 俗習漸赴文華及藩廢學館 亦湊隱士泉彦九郎竊恐公之志墜矣 乃設私塾以授徒襲稱旧名曰敬業塾 又慨三浜之闕地誌等書 嘗思纂輯事蹟以闡揚華 則採摭補綴有年于茲遂就此書 自三浜繁華之狀與海產乃富以至古迹逸事及景勝之美湯治之靈 斑々可據而案也其發地方之文華蓋不尠々矣 顧君既不遇於世 而隱焉地適遇君而顯焉抑亦奇矣以此推之則君所學之道不行也 又可以知此書之必行歟 君嘗請余叙其首 今將公諸于世寄書見促因援筆縱言以塞其責云

水戸陽軒處士

手塚惠 進撰

自叙

夫三浜之地也僻在東海之辺陬 蟹戸齧丁之所棲息漁父獵夫之所 雜踏其俗質朴椎魯熙々然而生焉悠々然而逝焉豈 亦有記當時之事者哉 是以欲考其往事焉則茫乎 嘗無識其閱幾千年幾世者矣 雖然徵諸古老口碑其間亦非無偉人傑士之遺業神社仏閣之興廢市街道路之沿革山林沼池之變易 可記可伝者也 今而不記述乎則亦將使後之人猶今人之有無考既往之嘆矣於是乎忘其淺陋 或就旧家覽其記錄 或徵諸神社仏閣之縁起 纔為一小冊子矣嗚呼余亦蟹戸齧丁之群而已矣漁父獵夫之儔而已矣固非有學識其所記述不能無鹵莽不訛之憾矣觀者怒焉

明治三十四年五月五日

編者識

凡例

- 一 余嚮ニ水門志ヲ著ス只往時ヲ叙シ当世ノ事ヲ記セズ今ヤ此篇ヲ草スルニ当テハ之ヲ補ヒ且ツ其謬ヲ訂ス
- 一 磯浜志ニハ儒林考義貞淑游俠方技等ノ門ヲ立テズ文献ノ徵ス可キモノ無レバナリ
- 一 湊志ニハ各街ノ戸口ヲ分テ之ヲ記シタレドモ磯浜平磯ニ至テハ其便宜ヲ得ズ已ヲ得ズ其全町ノ戸口ヲ挙ゲ
- 一 磯浜平磯両町ニ於テモ郷倉及ビ二十分一檢閱場等アリシコトナレドモ今其顛末ヲ考フ可キ旧記無シ故ニ之ヲ闕ク故ラニ湊志ヲ詳ニシテ磯浜平磯志ヲ省略スルニ非ズ見ル者之ヲ諒セヨ
- 一 甲子戦乱ノ景況ヲ記スルニ当テハ正党奸党等ノ名目ヲ掲ゲズ其正邪曲直ノ如キハ世自カラ公論アル可ケレバナリ

磯浜志

● 位置 地勢 幅員 面積

東南ハ太平洋ニ面シ 北ハ那珂川ヲ隔テ湊町ニ対シ 西ハ大貫町ニ接シ 西北ハ瀬沼川ヲ以テ下大野村大字川又塩崎稻荷村大字島田平戸ヲ望ム
内地ハ高敞道路平坦 西北ニ茂林アリ磐船山ト称ス 其東砂州横出那珂川ヲ束ヌ長サ凡ソ二三町

東西二十五町十間（東ハ大洗下箱磯ヨリ西字カヤバ迄）
南北二十二町三十間（南旭街二町目ヨリ北字地藏谷マデ）
周囲二里三十一町六尺一寸
面積四百六十四町六段四畝三步一合三勺

● 開闢 沿革

本町ノ開闢ハ最モ古クシテ考フ可カラズ 大洗神社ノ創立ハ斉衡三年トアレバ千年以前ノ事ナル可シ 古シヘハ宮田村ト称セシナリ

按ズルニ 古シヘハ此地ハ大洗神社ノ神領ニシテ 其祠官ニ於テ薄税ヲ以テ居民ニ田ツクラセ 之ヲ宮田ト称セシガ 後ニ村名トナリシナリ

大洗神社創立ノ際即チ斉衡年中ハ鹿島郡ニ属シ白鳥ノ荘徳宿郷宮田村ト称シ 古来ノ大村ナリ 文禄二癸巳ノ年街並ヲ改正シ中街ヨリ始ムト云フ 延宝年間ニハ茨城郡ニ属セシモノト如シ 同七年ニ磯浜村ト改称セラレタリ 然ルニ何レノ頃カ亦鹿島郡ニ属セラレタリ 明治維新ノ後暫ク若森県ノ管轄トナリ 既ニシテ新治県ノ所轄トナル 同八年五月五日新治県廃止セラレ茨城県ノ所轄トナル 尚ホ鹿島郡ニ属セシガ 同十一年郡役所ヲ立ツルニ及ビ大貫町ト共ニ東茨城郡ニ属スルニ至レリ

按ズルニ古昔ハ今ノ畑地ニ居住セシモノ、 中古ニ至リ漁業ノ便ニヨリ追々海岸ニ転ゼシモノ、如シ 今ノ街ノ最モ早く開ケシハ新街ナリト云フ

● フタバ街ノ開拓

旧ト原新田ト称ス 古渡藤四郎ナルモノ初メテ此ニ移住シ 嘉永六癸丑ノ年九月水戸藩ノ南郡奉行金子孫次郎ノ検分アリ 同十月廿日ヨリ開墾ニ着手ス 此ヨリ追々移住スルモノアリ 廿余戸ノ多キニ至ル

註：「ふたば」は、原文には偏が「女」で、旁は「而」の下に「大」という一文字です。

● 氣候 風俗 物産

春夏ハ東北風多ク秋冬ハ西風多シ 夏ハ甚ダ炎熱ナラズ冬ハ甚ダ寒カラズ 極寒大抵四十度極暑八十五度

風俗ハ男女皆質実 能ク漁商ニ従事スルモノ多シ 又間農耕ヲ勉ム 然レドモ富ムモノ寡少ニシテ貧民多キニ居ル 今民業ヲ概別スレバ左ノ如シ

商業	百〇五戸	農商兼業	七百九十二戸
漁業	八百〇二戸	工業	百五十二戸
農漁兼業	二百十五戸	割烹業	十一戸
医業	七戸	理髪店	二十八戸
回漕業	二戸		

右明治十九年ノ調査

●物産

鯉脯	一万二千五百四十一駄
鯉生脯	同上
鰯粕	二万七千七百七十俵 但シ一俵八十貫目
魚油	一千〇四十五樽 但シ一樽ハ四斗入
乾魚	五百駄

何レモ販路ハ東京両野並ニ本県下トス
米麦ノ産出極メテ乏シ 外ハ下野岩城等ノ運輸ヲ仰ギ 内ハ東茨城郡及ビ多賀郡等ノ漕輓ヲ待ツ 歳糶(さいてき)総テ八九千石トス

●戸数 人口 街名

戸数	二千二百五十一戸	人口	一万〇九百六十六人
内 男	六千二百廿五人	女	五千二百二十五人

文禄二年癸巳街並ヲ改正シ 街名ヲ附シ中街ヨリ始ムト云 永街ハ長キ故ニ名ヅケ 髭竈ハ老翁ノ鹽ヲ製シ居タル處ナルニヨリ呼ビシナラン 然ルニ明治七年ニ至リ 戸長古渡理平氏街名ヲ改メラレタリ 今旧街名ヲ附スルコト左ノ如シ

旭町 分テ一町目ヨリ五町目迄トス
旧字明神町一町目表通り

緑街 分テ一町目ヨリ五町目迄トス
旧字明神町一町目二町目

桂街 分テ一町目ヨリ五町目迄トス

旧字二丁目仲街金沢

砂街 分テ一丁目ヨリ五丁目迄トス

旧字通町永町髭竈

寿街 分テ一丁目ヨリ四丁目トス

旧字永町髭竈

ふたば街 旧原新田

註…「ふたば」は、原文には偏が「女」で、旁は「而」の下に「大」という一文字です。

今弘化二年ノ各字ノ戸数並ニ草高ヲ記載ス

明神町 本東町ト称ス 戸数二百十二戸

草高 二百六十二石五斗 此外ニ八軒町アリ

一丁目ト二丁目ノ境ニ三本松ト云アリ

一丁目 戸数 百四十三戸

草高 百八十石五斗

二丁目 戸数 百二十戸

草高 百四十三石七斗五升

中街 戸数 九十戸

草高 百二十石

金沢 戸数 八十六戸

草高 百〇七石五斗

通町 戸数 五十八戸

草高 五十三石七斗五升

永町 戸数 二百〇五戸

草高 二百〇三石七斗五升

髭竈 戸数 七十二戸

草高 百石

計 戸数 千百戸 草高 千二百石

尚派ツテ文政年中ノ調査ニヨレバ左ノ如シ

戸数 八百四十一戸 人口 三千六百十二人

内 男 千九百六十二人 女 千六百五十人

戸数ニ於テ千四百十戸 人口ニ於テ七千三百五十四人ヲ増加ス

● 神社

大洗磯前神社ハ大貴巳命（おこなむちのみこと） 少彦名命（すくなひこなのみこと）ヲ祀ル 其創建ハ文徳天皇元年ニ在リ 初メ大貴巳命少彦名命力ヲ勦セ心ヲ一ニシテ天下ヲ經營シ 又民ノ為ニ医薬ノ法ヲ定メ給ヒ 其後少彦名命熊野御崎ヨリ常世国ニ渡坐ニ及ンデ大貴巳命独リ其未ダ成ザル所ヲ巡テ造成シ給ヒシニ 武甕槌命（たけみかづちのみこと）経津主命（ふつぬしのみこと）天神ノ御使トシテ天降り 葦原中国ヲ皇孫ニ避ケ奉ル可キ詔ヲ伝ヘ給フニ及ビ 天下ヲ平ゲ給ヒシ広矛ヲ皇孫ニ奉テ隠レサセ給フ 是ニ於テ天神ニテ大貴巳命ノ為ニ天日隅宮（あまつひすみのみや）ヲ造リテ之ニ居ラシメラル 今杵築（きつき）大社はナリ

斉衡三年戊戌大洗磯前ニ天降り坐神アリ 初本郡ノ民塩ヲ煮ルニ 夜半海上ヲ望ム光耀天ニ映ズ 明日ニツノ怪石水次ニ在リ 高サ各一尺バカリ 是神ノ造ルモノニシテ尋常ノ石ニ非ズトテ 塩焼翁等異ミ居タリ 其明日二十余ノ小石左右列リ陪侍スルモノニ似タリ 彩色常ニアラズ或ハ沙門ニ象ル只耳目ナキノミナリ 已ニシテ神アリ人ニ憑テ曰ク 我ハ大奈母知少比古奈命（おこなもちすくなひこなのみこと）ナリ 昔シ此国ヲ造終テ東海ニ往マシ 今民ヲ濟ハンガ為ニ帰り来ルト 因テ之ヲ奏ス

天安元年八月辛未官社ニ預ラシメ 十月己卯薬師菩薩明神ノ号ヲ授ケ給ヒリ 醍醐天皇延喜ノ制ニ明神大社ニ列ル 古老ノ伝ニ曰ク 古シヘハ本社基址広クシテ所攝ノ小社凡四十余神戸千石ニ下ラズ祭祀ノ礼モ豊厚ナリシガ 永祿年中小田氏知ノ乱ニ兵燹ニ罹リ祠宇蕩然トナリ 神戸甚ダ衰ヒ小祠ヲ海浜ニ設ケテ僅ニ歳時ノ祭ヲ執行シタリ

東山天皇元祿三年七月己酉 源義公新ニ地ヲ相シ社ヲ建テ遷宮式ヲ行ヒ（今ノ山中ノ殿）中御門天皇正徳五年八月 源肅公本社ノ縁起ニ卷ヲ作テ之ヲ納メラル 享保十五年乙丑八月今ノ地ニ鎮座ス 即チ永祿以前ノ旧址ナリ 社領ハ六石八斗七升ニ合ナリシガ 仁考天皇天保年中烈公ヨリ十三石九合ヲ寄セラル 明治十八年四月国幣中社ニ列セララル

按ズルニ 御形ハ石ニ坐ス 其一ハ長サ二尺 其一ハ八寸ナリ

宮殿ノ構造ハ 元祿ノ制ハ正殿ノ高サ九尺 拝殿表一丈二尺余横九尺 前殿長サ八尺余横一丈八尺 華表一基高サ一丈二尺三寸広一丈二尺 現今ノ宮殿ハ 正殿ノ高サ二丈六尺表七尺横五尺二寸 上搏風四枚堅魚木三枚 拝殿表三丈六尺横一丈二尺余

随神門 表二丈四尺 横一丈六尺

按スルニ 旧事記ニ豊磐間命櫛磐間命門ヲ守衛ストアリ 二神ハ太玉命ノ裔ナリ

其他奉納ノ建築物左ノ如シ

石華表 一基 高一丈二尺 廣九尺三寸

元文元年氏子中ノ寄附スル所ニシテ 其願主ハ郡司兵右エ門ナリ 天保中ノ暴風ニ傍ノ松倒レ石華表モ毀レシカ 氏子中ニテ之ヲ再建スト云

華表 一基 高 二丈 廣一丈六尺

旧永街ノ氏子中ニテ献納スル所ナリ

原山見附ノ華表 一基 鈴木作兵エノ奉納スル所ナリ

神馬廐 天保年中ノ暴風ニ壞ル 安政年中再建

手洗所 同

礎石(ぎりいし) 及敷石 寛政九年ニ造ル

狛犬 久慈郡太田ノ人小林某及本町ノ人米川久兵エノ寄附スル所ナリ

神樂所一棟

社務所一棟

天水鉄瓶 天保三年甲子連中奉納スル所

世話人ハ染屋七三郎ナリ

石灯籠 氏子中ノ奉納スルモノアリ

田口與三エ門 加藤庄右エ門ノ奉納スルモノアリ

甲子講中ノ奉納スルモノアリ

旧曲松二町目世話人鴨屋源助 鳥羽屋伊兵エノ奉納セシモノアリ

公家堂上方ノ書セラレシ三十六歌仙ノ凶ハ 毎年三月太々神樂執行ノ際竈前ニ掛ルモノナリ

川上治右エ門ノ奉納スル所ナリ

本社ノ例祭ハ左ノ如シ

毎年十二月晦夜ヨリ正月七日マデ 社司神殿ニ籠リ糝醴ヲ供ヘ神樂ヲ奏セズ 本町中ハ鳴物ヲ禁ジ寺院ノ鐘ヲ鳴ラスコトヲ許サズ 町民作事ヲナスコトヲ得ズ 七日ノ巳ノ刻(午前十時)ニ至リ始メテ神樂ヲ奏シテ四海泰平五穀豊登ヲ祈リ了テ禁ヲ弛フト云フ

八月朔日 宮崎網掛両村ノ祠官二人矛ト楯トヲ護リ来ル 盾ヲ鬼板ト称ス広サ二尺長サ三尺ハカリ邪神ノ形ヲ画ケリ 鬼板ヲ持ツモノヲ政所(まんどころ)ト云フ素襖(すあう)ヲ着ス 従者四人肩衣袴ヲ着ス其一人ヲ代官ト云ヒ三人ヲ士ト云フ 五人皆馬ニ騎リテ神殿ノ北ノ壇場ニ至リ鬼板ヲ翻(かへ)ス事三五七ノ数アリ 哄喊スルコト三回 矛ト鬼板ヲ一坎ニ鎮メ四海泰平ヲ祈リ又喊声ヲ揚ルコト一度 帰リテ神殿ニ至リ所願成就ヲ告テ帰ル古シヘハ鹿島ノ祠官来リテ此礼ヲ行ヘシガ 遠路ナレバ風雨等ニ妨ゲラル、コトアルヲ以テ 鹿島神ヲ両村ニ祭リテ此礼ヲ修ムルコトトナリシナリ 古ノ壇場今ノ地ヲ距ルコト十町許リ

本社素ヨリ一ノ太刀アリ 祭礼ヲ行フゴトニ太刀ヲ溪水ニ洗フ 名ケテ金洗沢(かなあらひさわ)ト云フ 今ハ沙(すな)ウヅマリテ水涸レ名ノミ残レリ 此祭礼ノ式ハ武甕槌ノ神ノ天神ノ命ヲ奉シテ 大貴巳命ヲ順服シ給ヘル遺風ニ擬スルナリトゾ

八月上ノ子日 新嘗祭ヲ修シテ年穀ヲ祈ル

九月廿五日 有賀明神ノ祠官矛ヲ持シ 村民数十人護来リテ矛ヲ神殿ニ安シ祭ヲ修シテ去ル

八朔ノ祭典ニハ本町各字山車手踊等ヲ出シ 九月廿五日ニハ相撲ヲ催ス

九月廿九日 十一月十日ニモ亦祭祀ヲ修ス 宮ヶ崎ノ祠官来リテ之ヲ助け行フ

本社ノ靈驗ヲ伝フルコト左ノ如シ

十一月ヨリ正月ニ至ルマデ 嚴冬ノ時毎朝氣起リテ物ノ色モ弁ゼズ 名付テ海煙ト云フ然ルニ神殿ノ前ヨリ鹿島ノ浦ヲサシテ闊サ三十間ばかり海煙ナク 漁舟モ明ラカニ見ルコトヲ得 相伝是レ両社ノ神靈来往ノ道路ナリト

近村ニ鹿ナシ 時トシテ来ルコトアリ 鹿島神ノ使ナリトテ里人はヲイタハリ鹿島ノ方ニ向テ之ヲ縦チヤルナリ

本町ハ大抵漁業ヲ営ムト雖ドモ溺死スルモノナシ 亦盲人ナシ 適マ瞽者アルハ皆他ヨリ来リシモノナリ

元禄十八年七月七日銚子港ノ漁人出テ鰹魚ヲ釣リシニ 風波俄ニ起リ溺死七百五十六人ニ及ブ 中ニ本町ノ漁人六十三人アリシガ一人モ死セシモノナシ 此輩画工ニ託シテ玉取り龍ヲ画カシメ神殿ニ掲テ賽ス 中ニ一人アリ頑トシテ其義醜ニ応ゼズ 忽ニシテ眼口歪斜(かしや)シ両脚萎エ五日ニシテ死ス

同九年七月廿六日 岩城小名四倉等漁人出デテ鰹ヲ釣リシニ 暴風ノ為ニ各艇覆没シ溺死スルモノ三千余人ニ及ブ時ニ 本町ノ漁人十五人其舟ニ乗合居リシニ 破レタル舟板ニ取着キ漂流スルコト一昼夜 廻船ニ救ハレ皆死ヲ免ル、コトヲ得タルハ 此神ヲ祈念セシニヨルナリ

寛永元年七月 本町ノ漁夫藤左エ門等十四人一船ニ乗リ組ミ鰹ヲ釣リシニ 暴風ノ為ニ其艇覆カヘリ 十二人免ガレシガ其中ニ二人ノミ溺死セリ 二人ハ多賀郡逢瀬川尻ノ人ナリ

加茂エ門ナル者小艇ニ乗テ鯛ヲ釣リケルカ大風ニ遭テ帰ラズ 其家皆溺死セシモノト思ヒ仏事ヲ営ナミ居リシニ 七日ノ後報有リ 曰ク乗組員四人下総長井浜ニ漂着セリト 其様子ヲ聞クニ 海上ニ漂流スルコト六日食フベキモノ無シ 唯此神ヲ祈念セシノミ

(補) 本社御禊並ニ御畳ヲ永世奉納スルハ関根与一右エ門氏ナリ

御禊

長サ二尺四寸 横三尺

錦ノ縁布四寸

奥ノ院ノ御畳上座

同下座

長 六尺

長 六尺

横 二尺

横 二尺八寸

御禊ノ裏ニ認メタル文左ノ如シ

明治三歳庚午九月吉辰

関根基之介

源忠善浄手

九拝敬書

本社ノ祠官ハ累世大塚氏ナルガ明治六年ニ至リ罷ラル 目今ノ宮司ニハ斉藤普春氏 禰宜ニハ田口勲氏奉仕セリ

田口氏ハ累世祠官タルヲ以テ 尤モ本社ノ旧事及ビ本町ノ歴史ヲ記憶セリ 編者ノ本志ヲ輯ムルニ当テ氏ニ質スモノ多シ

末社

八幡社 元祝町ニ鎮座セシヲ 天妃神ヲ創建スルニ際シ 本社境内ニ移サル

痘神社 石尊社 稻荷社

大杉社 大貴巳命ヲ祀ル

清良社 小幡出雲守良清ヲ祀ル

御嶽神社 国常立尊 大貴巳尊 少彦名尊ヲ祀ル

三峯神社 伊弉諾尊 伊弉冉尊ヲ祀ル

太神宮 天満宮 金刀比羅神社 大物主神ヲ祀ル

水神宮 水天宮 罔象女尊ヲ祀ル

与利幾神社 建御名方命ヲ祭ル

安永六年十一月清水平太夫ナルモノ、漁艇 海上ヨリ漂流セル異木ヲ挽キ来ル 後ニ神アリ人ニ憑テ曰ク 諏訪明神ノ霊木ナリト 因テ之ヲ祀ルト云フ

境外ノ神社

金刀比羅神社 昔シハ原ニ在リシガ 寛政ノ頃俊山ニ遷ス

大六天 六月中旬旧字金沢ニテ祝フ

七竈大六天 原山ノ西側ニ在リ

牛頭天王 旧字永街権現台ニ在リ

関根社 関根氏ノ氏神ナリ

外ニアル稲荷ノ社左ノ如シ

出世稲荷 旧山ノ台ニ在リ

大手稲荷 旧二町目ニ在リ

万海稲荷 大喰稲荷

二社ハ持主ノ綽号ニヨツテ称ス

台 稲荷 台ノ清吉ノ持主ナリ

永野稲荷 八三郎稲荷 山王稲荷

西網稲荷 十日稲荷 鈴稲荷等アリ

原山稲荷ハ湊町関戸ノ人栗原与吉ナルモノ 笠間胡桃下稲荷ヲ信仰セシガ終ニ狐憑ノ状トナリ死ス 死ニ臨ンデ原山ニ稲荷神社ヲ勧請センコトヲ遺言セルニ因リ遺族ニテ建タルナリト云フ

● 仏閣

西福寺ハ俊名山無量寿院ト号ス 本町桂町三町目ニ在リ 天台宗山門派ナリ 寺格ハ七等三級ナリ 寛弘年中比叡山恵心院源信僧都ノ開基ナリト云フ 一説ニ荣信和尚ナリト云フ未ダ孰レガ是ナルヲ知ラズ 此寺ハ上野国新田郡世良田長楽寺ノ法流末寺ニシテ 旧東茨城郡稲荷村大字島田ニ在シガ 元禄十二巳卯歳義公ノ命ヲ以テ本町ニ移サレ 時ニ本寺ニ十五世ノ住職舜海和尚ノ代ニシテ 国役寺ト称シ水戸封内天台宗寺院ノ取締ヲ勤務ス 朱印地若干アリ 寛保年中廿六世住職温淳和尚本堂ヲ建築ス 文政七甲申年二月焼失セリ 其後建築セシ本堂ハ元治甲子ノ水戸内訌ノ際兵燹ニ罹レリ 明治廿四年八月四十六世ノ住職融信和尚本堂ヲ建築スト云 明治十四年本山直末ニ属シ七等大寺ニ編入セラル 開基寛弘年中ヨリ明治三十三年迄八百九十余年ニシテ四十六世ニ及ベリ 現住職深達師ノ陳ル所ナリ

本尊阿弥陀如来坐像 但シ木製長五尺三寸 源信僧都ノ作ナリ

本堂 間口八間 奥行三間

仏間 間口三間 奥行四間

地藏塔 今ハ無シ 地藏菩薩ハ木ノ立像 行基菩薩ノ作ナリ

不動塔 間口二間 奥行三間

明治十二年十一月建築ナリ

不動明王ハ 智証大師ノ筆 緝地ニシテ縦三尺三寸横一尺六寸極彩色ナリ 旧水戸

藩侯ノ所蔵ニシテ東照宮ノ別当如日山大照寺ノ什宝 元禄五壬申六月同寺住職慈雲

院敬心慧空修理ヲ加フ 明治三庚午四月徳川昭武候ヨリ拝領ス

鐘楼今ハ無シ

廿五世ノ住職舜海和尚ノ鐘銘ヲ左ニ記ス

華鯨新制 器掛海壘 朝送鐘聲 漁肅往還 控惟無尽 応惟亦然 三世無間
十方無辺 之朝之夕 無愚無賢 物我由聞 共醒迷眠 梵響不断 却々永伝
寺門檀門 三会綿々
于時室永二乙酉林鐘

上院伝燈大師堅者法印舜海囀道題

弁財天 旧ト境内東隅ニアリシガ 今ハ尊天像ノミ存ス

末寺 ハ養福院ノミ 因テ其名ヲ掲グ

養福院 本町ニ在リ 長徳寺 嶋田 正観院 川又 長泉院 下大野

● 土地種別

民有地 二百九十九町九畝九歩八合四勺

内訳

二百九十六町九段五畝廿六歩八合四勺 第一種

此内 田 三十九町五段八畝十一歩

畑 百六十三町四畝四歩

畦畔 二町五段五畝十歩八合四勺

宅地 三十町八段六畝三歩

民有地ノ外ニ四百六十四町六段四畝三歩一合三勺ト云フモノアリ 此内官有地百六十五町五段四畝廿三歩二合九勺ヲ除キ四種ニ区別ス 第一種ヲ神社地 第二種ヲ警察分署敷地 第三種ヲ山林河沼萱生地等トシ 第四種ヲ寺院敷地トス

溜池三ヶ所アリ其反別一町四段一畝三歩トス 環洞池ナルモノアリ此処彼処ヲ環ノ如ク廻リテ通フヲ以テ名ヅク 中池ハ東西池ノ中央ニアル故ナリ

河岸地ハ二畝二十七歩トス

南蕃河岸或ハ菜番河岸トモ云フ 川又へ渡ル處ナリ

井ノ著名ナルモノハ柘井戸トス 和銅池ノ辺ニアリ

水戸良公此水ヲ掬シテ美味ナリトテ名ヅケラレシト云フ 泉上ノ井是ナリ

谷津ヶ峯ノ幽谷ヨリ水ノ流ル、所ヲ金沢トス 其水源ヲ泉上ト云フ 元禄年中大洗神社ノ御手洗水ヲ永横町迄引キ 一街ニ井三ヶ宛ヲ置キテ飲用水トス 此土功ニ費ス日数一ヶ年ナリ 然レドモ使用スルコト三四年ニシテ其事已ムト云フ

塚地 一町五段二十九歩アリ 其目左ノ如シ

車塚ハ口碑ニ伝フル所ニヨレバ 昔シ尊キ神アリ 神輿ニ乗リテ降レル所ナリト云フ 建御名方神ヲ祀ル

琵琶塚 前同様口碑ノ伝ニ尊キ姫神アリテ此地ニ降リテ隠レタリシガ 此姫神ノ愛翫セシ琵琶ヲ蔵メ祭リシナリト云フ 大塚亦諏訪塚トモ云フアリ

供養塚ハ 原山ノ西側ニ在リ 寛永年中元網又兵エ氏松苗千株ヲ植エ大乘妙典石経ヲ

轉読シテ供養サレシナリ
行人塚 坪数二畝十一歩アリ 四面畑地ノ中ニ在リ 古松七八本現存ス 相伝フ行者ノ住ミシ址ナリ
日下ガ塚ハ 東方畑地ニ在リ 其坪数一町三段三畝十歩ナリ 朱ノ土ニ化シタルモノ或ハ曲玉ヲ掘出スコトアリ 由緒アルモノ、墳墓ナル可シ
此外ニ稻荷仙王塚アリ 仙王塚ハ天保ノ凶歳ニ取崩サントシテ崩シ得ザリシナリ
呼バリ塚ハ 涸沼川ノ上ニ在リ 坪数八畝十五歩ナリ 相伝フ漁船ヲ出ス時ニ川又ニ住スル漁夫ヲ螺貝ヲ吹キテ呼ビシ所ナリト 此塚一名ヲ機織塚又織姫塚トモ称ス 口碑ニ伝フル所ニ依レバ 義公此所ヨリ泳イテ本水底ニ至ラレシニ 姫アリテ機織シテ在リシヲ以テ名ツク

山林ハ三十二町九段六畝十三歩ニシテ 又此内ヲ区分シテ 用材林二十一町七段九畝廿一歩 雑木林二町歩 防風林九町一段六畝二十二歩トス
其目左ノ如シ

大洗山ハ後ニ記ス

磯山 浜山 砂山 新山 原山 百間山

緑山原山西浦山或ハ裏山トモ云フ

吹上ニハ昔シ大蛇棲ミテ 時々人ヲ驚カスコトアリシト云フ

谷津ヶ峯 東ハ養福院ト西ハ西福寺トノ間ノ狭間ヲ云フ 今現ニ現当谷津ト称ス 秋

山某此山ヲ開拓シテ田中下トモ称ス

檜山ハ加藤氏ノ居処 椿山ハ大塚氏ノ居処 一二伊勢守古屋敷ト称ス

どんどん山ハ原町ノ上ニアリ

金沢山ハ俊名山ト山王ノ続キナリ

川ハ段別ニシテ二十八町一段十八歩アリ

涸沼川ハ涸沼湖ノ下流ナリ

巴川ハ涸沼川ト那珂川ト合スル所ナリ

新川ハ大貫町ノ境ニアリ 元禄九年ニ開鑿セシ所

名所 松

子ノ日原 祝街ヨリ本町ニ通ズル新道ニ在リ 東方太平洋ヲ望ミ漁艇賣船ノ往反ヲ一目ノ下ニ瞰ム可ク白沙青松相連リ風向最モ佳ナリ 源烈公ノ建給ヒシ碑アリ 其形方面ノ黒磁石ニシテ公ノ讀ミ給ヒシ和歌ヲ刻セリ

万代を満つに契りてけふこそは 子の日の原に引かれきにけり

曲松ハ上古ヨリ地名トナレリ 今郵便局ノ所在ナリ

相生松ハ神木ナリト謂ヒ伝フ小祠アリ 天保ノ暴風ニ弱リテ終ニ枯レタリ

大松ハ吹上ノ左ニ在リ

這松ハ西福寺ノ境内ニ在リシガ 文政年中焼ケタリ

枝垂松ハ旭町五郎兵衛稻荷ノ神木ナリ

好山亭庭松ハ高サ一丈余 四方二丈余ニシテ 潜龍天ニ昇ルノ形ニ似タリト云フ

● 海岸 磯岬

此海ヲ袖ガ浦ト称ス 平潮凡ソ三尺若シ東南風ノ烈シキ時ハ高潮常度ニ超フルコト六尺余
潮道西ニ向フヲ常トス 土人之ヲ直潮(まじほ)ト曰フ 適西ヨリ東ニ向フ時ハ称シテ逆潮
(さかしほ)ト云フ

海面ニ列スル磯石ヲ南方ヨリ順次叙スルコト左ノ如シ

久下磯 久(姓)其居宅ニ在ル故呼ブト云フ

燕磯 久下磯ノ近キ所ニ在リ

割塚磯 桂町二丁目ノ下ニ在リ

大磯 同所ニ在リ 其東ニ地獄石アリ 北ニ放屁(へっぴり)石アリ 前方ニ箱石長磯

大溜アリ

籠口 俗ニドンブリコト呼ブ 緑町一丁目下ニ在リ

大磯 同所ニ在リ 其北ニ平代磯アリ 又平磯ト云フ 其平坦ナルヲ以テ呼ブナル可

シ 大磯ノ東ニ里石アリ 其沖ニ輪ノ嶋背船アリ 又長磯藻屑磯等相連レリ

鞍掛磯 昔シ神馬ノ鞍ヲ掛タルヨリ名ヅクト云フ

竈磯 形ニヨリテ名ヅケタルナリ 此辺海藻及□貝多シ

鳴門錢磯畠作等其北ニ連続ス 畠作ハ畝ヲタテタル如キ形ナレバ名ヅケタルナリ

筑輪磯恋崎等ハ貝ノ附着スル磯ナリ 大嶋鯨島等相連ナレリ

雄咲耶(をさくや) ハ大洗崎ノ良位ニシテ岸ヲ距ルコト十町 那珂河口ノ坤位廿八町バ

カリニ在ル暗礁ナリ 周囲三十間余ニシテ水ニ隠ル、コト六尺バカリナリ

雌咲耶(めさくや) 雄咲耶ニ並ベル暗礁ナリ 周囲二十間余 水ニ隠ル、コト八九尺ニ

達ス 此辺水ノ深サ四十尺ナリ

此二礁ハ蓋シ岸辺ニ接続シタルモノナル可シ 此二礁ノ上ニハ常ニ激浪騰上ス

ルヲ以テ 人皆暗礁タルヲ知り之ヲ避ルヲ以テ航舟ノ触レ碎クル患ナキノミナ

ラズ 暴風ノ際ハ其陰ニ入り岸ニ碇泊シテ危難ヲ免ル、コトヲ得ト云フ 盛夏

ノ候乾潮ノ際雄咲耶ノ頭ヲ現ハスコトアリ

大甕磯神磯等其次ニ在リ 神磯ハ神靈アリト云フ

横磯稻穂中磯其次ニ在リ

平太郎磯ハ 平太郎ナルモノ此ニテ魚ヲ釣リシナリ 南張上北張上夷子磯平カタ磯馬

洗洞等相連ナル馬洗洞ハ神馬ヲ洗ヒシ所ナリト云フ

次ニ鈴掛石棟梁磯滑磯砂磯霧瀧磯等アリ 霧瀧磯ハ白波ノ立ツコト霧ノ如キヲ云ナリ

沖ノ曝ハ 大洗山ノ下ヨリ良位那珂川ノ口ヲ距ルコト十町ハカリノ所ニアル暗礁ナリ
周圍廿六七間満潮ノ時ハ水ニ入ルコト七八尺乾潮ノ時ハ三四尺ノミ此辺ノ水
ハ深廿五尺ナリ

強(こわ)磯 赤磯 牛磯 能下磯 堀垣磯 滑(すべり)磯 砂磯 霧瀧磯等曝磯ニ
連ナレリ 霧磯ハ白波ノ立ツコト霧ノ如キヲ以テ名ツク 次ニ深通り磯アリ(又大合
小合ト云) 次ニ跳(はね)磯ニ至テ尽ク

● 大洗岬

大洗岬ハ東南ニ伸張ス 古シヘ大洗磯前ト称ス 岸頭ニツノ円丘降然トシテ松樹蒼鬱タ
リ 遠ク之ヲ望メバ蓋ヲ張ルガ如シ 因テ蓋山ト呼ブ 漁人視テ以テ舟路ノ指針トス
按ズルニ上古ハ此浜ヲ大荒磯ト称シタルヲ 後世ニ至リ語尾ノモヲ省キ大アラヒト
呼ニ至レルナリ 或ハ曰ク灘磯(おにやらひ)ナリ

此山中ヨリ清泉流レ出テ 終ニ霧瀧磯ノ辺ニ落チ琴引ノ瀧トナル 其清冷ナル眼疾ヲ治
ス可シ 海岸ハ前ニ述ル所ノ磯巖突兀トシテ並列シ 龍ノ伏スガ如キモノアリ 虎ノ踞
スルガ如キモノアリ 激浪沸騰玉ヲ碎キ雪ヲ飛ス 夷ニ東海ノ壯觀ナリ 夏日ノ客来遊
スルモノ多シ 逆旅(はたごや)ニハ幕末ノ頃ハ 江戸楼甲子(ぎへね)楼等繁盛ヲ極メ
シガ 其後魚来庵ノ独り舞台トナリタリ

魚来庵 主人ヲ川崎伝兵エト称ス 維新以来尤モ繁盛ヲ極ム 王公貴人ノ来遊スルモ
ノ必ズ之ニ泊スルニ至ル 其後金波楼ナルモノ起ル

金波楼 ノ主人ヲ石井藤介ト称ス 少フシテ才慧アリ 魚来庵ニ接シテ三層楼ヲ営ミ
別第二ヶ所アリ 第一別第ヲ三層トセリ 其盛ナルコト茨城県下第一トス

小林楼 主人ヲ吉川卯之介ト称ス 二家ノ如ク壯麗ナラズト雖ドモ 手軽ヲ以テ称セ
ラル

近來箱磯ノ中ニ養魚場ヲ設クルモノアリ 夏日海魚ヲ養ヒ置キ釣竿ヲ貸シテ之ヲ釣ラム
今此地ニ遊ビシ名家ノ詩數篇ヲ掲グ

大洗

亀井有斐

壓倒亢龍氣象雄 高楼東面聳青空 鮮鱗活瓮滿盤夕 共酌芳醇醉晚風
百尺高楼眺望宣 布帆無數孕風馳 揮來椽筆氣磊落 万里波濤作墨池

大洗三十首

渡邊 州華

大洗祠前是絶東 仰首白浪浸青空 欲跨竈背游三島 不借輕帆万里風
海濼承陽不覺冬 高楼儘可養疎慵 倚欄時望狂濤碎 碧玉盤中走白龍

白鷗泛海影雙々 來去從他激浪撞 処世還知歸趣一 活機收拾入新腔
不識玻窓映曙曦 輕衾穩臥與慵宣 無端呼覓幽人夢 孤鶴一声振翼時
洗山一半帶斜暉 泛々漁舟逐隊歸 海上晚來風力烈 惟看俊鶻蹴濤飛
下物新鮮美可茹 海樓晚酌酒醇如 万盤研鱸桜花色 風味尤佳吉鬣魚
(鯛 一名 吉鬣魚)

好尋清境洗塵污 松籟潮声入耳娛 仙藥何須求泛海 此心安処是蓮壺
拍岸濤声萬馬濟 通宵孤客思悽々 起推窓戶望天外 積水茫茫北斗低
古廟巖然声海涯 万松圍繞境清佳 登臨益感神威遍 偏使幽人暢雅懷
巖上忍寒呼快哉 空洋万里眼前開 狂瀾捲雪復何怪 凜烈風從水海來
愛静來遊東海浜 石磯何処好投綸 一竿風月存真趣 追想磻溪避世人
風捲濤時雲起雲 々濤沟湧看離分 蘇潮韓海尋常耳 始識乾坤大活文

評 大哉言

海畔登樓倒酒樽 與醉忘却世塵喧 欄前半夜吟懷濶 万頃烟波月一痕
浴他鹹水護奇寒 嘯養方知四体安 獨坐觀潮徐酌酒 陶然一醉百憂寬
臨海超群大洗山 水天一碧足怡顏 漁翁不識鯨波外 航海遙通柔港灣
□負江山二十年 濤声松影兩怡然 重游今夜何堪感 正是尖風凍月天
紛々輕薄逐塵囂 獨有間人愛寂寥 客土何懷非士嘆 海樓晝夜聽寒潮
醉吟臨海獨推敲 迂拙恐招沙鳥潮 好個幽人同臭味 訂他詩酒忘形交
危礁乱立激狂濤 噴雪翻空万丈高 頓悟波瀾真妙境 壯心勃勃憶文豪

清遊今夕洗山阿 觀海洋々詩趣多 明月一輪浮在水 金波楼下碎金波
悠然植杖立長沙 極目滄溟千里遐 認得海天々尽處 青螺一点是金華
豪懷縱酒水雲鄉 爛醉高歌逸興長 絕感東陲王化洽 風波無警太平洋
小瀑奔飛瀉大瀛 轉教吟客耳根清 風濤以外潺湲響 聽取岷洋不断声
残夜風寒潮滿汀 餘声動枕夢初醒 擡頭忽認玻窓白 莫是鷺波浴大星
万里東洋□碧澄 天將曙處紫煙蒸 須臾閃爍江波湧 中有瞳々旭日昇
倚遍金波百尺樓 太平洋上望悠々 孤帆一片衝波去 奈此騷人万里憂
巨海涌天雪浪侵 断崖千仞儘登臨 世間快事真無比 大洗祠頭大洗心
拖筇海畔試幽探 何処求鮮酒是耽 未上其樓已發興 佳名耳熟魚來庵
酒可酌兮詩可拈 瀛浜寄興養情恬 人生何似觀瀾樂 不省星々鬢雪添
老樹肅森翠遶巖 晚來情境共超凡 飛鴻影尽連天水 万頃寒波月半銜

● 海防御陣屋

海防御陣屋ハ本ト本町ノ西辺ニ設ケラレタリ 天保五壬午歲烈公ノ建設スル所 先手組ヲシテ之ヲ守ラシメシガ 同十三丙寅ノ歳物頭ヲシテ来住セシメラル 初メテ来リシモノハ岡野庄五郎ト云フ人ナリ 最終ノ物頭ヲ鈴木庄蔵ト云フ 水戸藩内訌ノ時ニ攘夷党ニ与シ一方ノ將タリ 幕府ニ降リ死ヲ賜フ

● 二十分一検閲所

二十分一検閲所ハ 水戸藩ノ時ニ漁獲スル魚ノ二十分ノ一ヲ税トシテ徴収スル所ナリ 明暦三年ヨリ初ルト云フ 其遺地ハ旭町一丁目桂町三丁目同五丁目ニ在リ

● 教育

小学校ハ明治七年ニ創設セシナリ 始メテ主任教員タリシモノハ旧松川藩ノ侍神谷信順氏ニシテ 之ニ次クニ高橋純氏ヲ以テス 明治廿八年ニ至リ改築シテ高等小学校ト分離セリ 只今ノ校長ハ宮本貞美氏ナリ

学齡児童 千七百四十八人

内 男 九百六十七人 女 七百八十一人

就学 千二百十八人

内 男 六百八十九人 女 五百二十九人

右ハ高等尋常並ニ祝町校ヲ合算シタルモノナル可シ 今本校ノ在籍生ハ左ノ如シ

在籍 八百九十六名

内 男 四百九十一名 女 四百〇六名

高等小学校ハ明治廿八年七月ノ創設ナリ 其時ノ校長ハ小池平氏ナリシガ 只今校長蔀亀之介氏ナリ 在籍生徒ノ数左ノ如シ

在籍 二百三十四名

内 男 百四十八名 女 八十六名

尋常小学校ノ敷地ハ一千九百五十六坪

校舎ノ建坪 百十三坪ナリ

高等小学校ノ敷地ハ 二千八十九坪

校舎ノ建坪 三百四十坪ナリ

● 水産試験所

水産試験所ハ明治廿三年四月一日県令百廿号ヲ以テ告示セラル 同五月三日ヲ以テ本町ニ設置セラル 技手若月貫一氏担当ス

● 銀行

磯浜銀行 ハ資本金三万円ヲ以テ明治廿七年五月廿七日認可セラル 頭取ハ鴨志田源介氏ナリ

磯浜商業銀行 ハ資本金十二万円ヲ以テ明治三十四年一月五日ヲ以テ開業アリ 頭取ハ田崎左金次氏ナリ

● 郵便電信局

郵便電信局 ハ桂町ニ在リ 局長ハ鴨川治三郎氏ナリ

● 漁業

鯉鱈雑魚ハ漁業ノ主ナルモノニシテ 三月ヲ花見鱈 五月ヲ入梅鱈 六月ヲ鯉 十月雑魚 十一月御講鱈（一向宗ノ報恩講）ト云フ
漁舟 五百四十艘 漁夫二千〇八十余人ナリ

但シ臨時雇ヲ除ク 一定シ難ケレバナリ

元和五巳未歳備前七浦ノ人粟野甚三郎ナル者本町ニ来リ 大網操ノ使用法ヲ伝フ 其家ヲ元網ト称ス 川上平重氏はナリ 其後追々漁業進歩シ 寛永二乙丑ノ歳乃ハチ水戸藩祖威公ノ時初メテ漁業税ヲ納ム 其人名左ノ如シ(粟野ハ姓ニ非ズ 蓋シ地名ナラン)

元網又兵エ 與右エ門 弥兵エ 與一右エ門

源 兵エ 吉郎兵エ 仁 平 以上七人ナリ

義公ノ時ニ至リテ 三十二人ニ及ベリ

義公蛤ヲ伊勢ヨリ取り寄セ 此浦ニ放タル後ニ鹿島浦ノ名産トナレリ

目下漁業家ノ巨擘ナルモノハ 川上友右エ門 清水平吉 山戸庄右エ門等ノ諸氏ナリ

● 里 正

本町ハ千余年前ヨリ開ケタルモノナレバ 此ヲ治ムル里正モ有リタルナル可シ 極メテ古キコトハ今考フ可カラズ 佐竹義宣水戸居城ノ時ニ名主トナリシハ土佐若狭ト云人ナリトゾ是レ関根氏ナリ 武田万千代殿ノ時ニ源兵エナルモノ名主トナル此ヲ服部氏トス 次ニ蔵之介ナルモノ名主トナル此ヲ加藤氏トス 寛永十八年水戸封内検地アリ 此時ノ庄屋ヲ茂作トス 次ニ助次郎(関根)ナル者庄屋トナル 天保改正ノ頃ノ庄屋ヲ奎ノ允氏トス 此時ニ一戸ノ農ヲ二石五斗ト定メ 全町ノ農家ヲ四百八十戸トシ 平均一戸ニ付一両宛合計四百八十両ヲ徴収シ 其内二百五十両ヲ官ニ納メ 残金五十両ヲ全町ノ費用ニ充テラル 爾来関根氏古渡氏等更々庄屋ヲ勤ム 近來ニ至リ川上友右エ門氏勤メラレタルコトアリ 明治六年ニ至リ古渡理平氏戸長トナリ 浅井光政氏之二代リシガ 後ニ大洗神ノ宮司トナレリ 目下ハ山崎熙氏有給ノ町長タリ

町会議員

関根 栄	鴨志田源助	溝口倉吉	関根喜兵エ
田口利兵エ	加藤辰之介	古渡彦六	田中菊太郎
高崎音三郎	関根源吾	清水平吉	小松崎捨五郎
川崎吉兵エ	大森卯之介	田山龜次郎	石田半兵エ
上沢小次郎	磯崎寅次郎	鈴木常介	鬼沢富次郎
津川善五郎	山戸仙之介	柴田藤十	川上友右エ門

● 船里正 漁業事務所

本町ニハ浜方ト称シ漁業上ノ事ヲ管理スルモノアリ 之ヲ船庄屋ト称ス 天保年中ニ至リ始メテ置ク 坂場宇右エ門氏始メテ命ゼラレ 其子勇太郎ニ伝フ 現今ハ漁業事務所ニテ之ヲ管理ス

漁業事務所ハ明治廿五年一月八日認可セラル 鴨志田源介氏所長トナル 務メテ漁業上ノ改良ヲ計ルト云

● 舊家 豪家 現今ノ有志家

相伝フ 往古本町字惣根ニ大山民部ナルモノアリ 独力ヲ以テ寺ヲ建ツ 大山寺ト号ス 民部大洗神社ニ奉祀ス 祭典ノ日ニハ長棒ノ筭輿ニ乗リテ至ルト

同時ニ字宮田ニ宮田將監ナルモノアリ 大山ト共ニ常陸長者ト称セラレシト云フ 今圃中ニ一小森アリ 里俗將監様ト称ス 古松三株榎一株椿三株アリ 其間ニ小祠アリ 古来ノモノニ似ズ 或ハ所有主ノ建タルモノナル可シ

今ニ大山氏ノ壙將監屋敷其他沼端橋本椿山檜山ノ遺址アリ 大学院鈴木氏ハ天正年中ノ旧家ナリト云フ

鈴木氏ハ紀州藤代ノ武士ニシテ由緒アルモノ、由ナリ 関根氏ハ本町ニ居住スルコト五十三世ニ及ブト云フ 其旧家ナルコト知ル可シ 家ニ記録アリ文禄ノ頃ヨリノ事ヲ記セリ 大洗明神ノ御禱ハ永世当家ノ奉納スル所ナリ

元網又兵エ氏ハ天保ノ飢饉ニ貧民ヲ賑ハサンガ為金二百兩ヲ義捐セリ 尚千二百五十兩ヲ無利子ニテ貸附タリ 庄屋奎之允初メ其金ヲ借りタリトゾ

尚此時西福寺境内ニ賑救場ヲ設ケ飢民ニ粥ヲ施与セシ 其救米ヲ出セシハ湊町ノ木内兵七大内要介潮来町ノ榊原啓介本町ノ日野屋九兵エ氏ナリ

目今ノ富豪家ハ漁業家ノ外ニ醸酒家醤油醸造家等ナル可シ 延宝ノ頃ノ醸酒家ハ又兵エ氏ノ造石額千石ニ達セシ由ナレドモ 其外ハ今考フベキモノナシ

現今ハ酒造家ニハ田口茂兵エ 坂本彦一 小松崎捨五郎ノ三氏ニシテ 就中田口茂兵エ氏ハ県会議員ノ榮職ヲ帯ヘリ

醤油製造家ニ戸アリ 古渡彦六 川上常次ノ二氏ナリ 漁業家ノ川上友右エ門 清水平吉 山ト庄右エ門氏等ナリ 磯浜商業銀行ノ株ヲ二百株所有スルハ清水直吉氏ナル由

元治甲子ノ水戸藩内訌ノ時 本町有志者ノ進退

古渡理平氏ハ水戸藩ノ郷士タリシガ 攘夷党ニ属セザルヲ以テ市川党ト看ナサレ 元治元年甲子八月攘夷党ノ本町ニ入ルニ及ンデ 難ヲ行方郡五町田村ニ避ク 十一月事平グ乃チ帰ル 明治元年攘夷党ノ再タビ国ニ入ルニ及ンデ 父ト共ニ潜伏ス 後駿河ニ移リ亦上総山辺郡大網宿ニ潜伏中父ハ病死セリ 同六年一月帰郷シ新治県庁ニ自首シ平民ニ降サレタリト云フ

坂場勇太郎ハ水戸藩ノ時ニ船庄屋ヲ勤メ郷士タリ 一橋慶喜公ノ護衛トシテ京師ニ在リ 後藩ヲ脱シテ官軍ニ属シ軍曹トナリ 伏見鳥羽及奥羽ニ転戦ス 賞典禄ヲ賜ハル 嘗テ神奈川県ノ大属トナリシコトアリ

其他攘夷党ニ属シテ幽囚セラレタルモノハ 左ノ如シ

永井幻洞 幽囚中死亡

菊池魁介 幽囚中明ヲ失フ

坂場熊太郎 関秀彦 関根玄郁 及二十分一役小貫忠三 大洗祠官大塚修理 ノ諸氏ハ幽囚ノ後無事帰郷スルヲ得タリ

● 祝町ノ沿革

祝町ハ当今磯浜町ニ属スレドモ 古昔独立村ニシテ 白鳥ノ莊沖ノ州村ト称ス 元禄己巳ノ年岩船町ト改メ 終ニ転訛シテ祝町ト呼ブニ至レリ
野水半次ナルモノ紀州ヨリ来リ マカセ網ノ使用法ヲ伝授ス 後ニ田地三十石ヲ有シテ字青塚ニ住居シ 馬渡シヲ業トスト云フ 其後那珂川次第ニ南方ニ移リ 祝町ノ北岸欠損シテ青塚モナクナリシト云フ

● 戸数

幕政ノ頃ハ 祝街モ繁昌セシヲ以テ 五百余戸アリシ由ナレドモ 今ハ纔ニ二百三十二戸ヲ存スト云フ

● 神社

天妃神ハ橘媛ヲ祀ル 元禄三年義公之ヲ創建シテ 本街ニ鎮座セシメ 湊町ノ祠官鈴木長門 磯浜町ノ祠官大塚伊予ヲシテ祀事ヲ掌ドラシメラル 鹿島郡那珂郡ト大書シタル大旗一旒ツ、下附セラレ 是ヨリ両祠官隔年ニ更リテ祭事ヲ執行セシガ 明治二年ニ至リ磯浜町ニ專屬スルニ至レリ 祭日ハ陰曆三月廿三四両日ナリ

按ズルニ天妃神ハ本ト明ノ僧心越禪師ノ建ツル所ナリ 義公ノ時禪師来リテ水戸ニ客タリシニ 祇園寺ヲ創シ境内ニ天妃権現ヲ祠ル 謂フ是レ航海漁業者ノ守護ナリト 義公之ヲ祝町及ビ多賀郡磯原ニ移ス 天妃山岬岨権現ト称ス
愚考 天妃神ハ今ニ志那ニテ祀ル由 蓋シ堯ノ二女舜ノ妃トナリシ娥黄女英ヲ祀リシモノナラン

本祠ヲ創建スルニ当リテ 此山ニ鎮座セシ八幡宮ヲ大洗神社ニ移セリ 野水半次ノ信奉稲荷ハ西町ニアリ

● 仏閣

大綱山願入寺ハ真宗大谷派ニシテ 其先藤原氏ナリ 藤原鎌足ノ玄孫内膳六世ノ裔 宰相有国五世ノ孫 皇太后宮ノ大進有範ノ長子幼名ヲ松若丸ト称シ 長ジテ範宴ト改ム 是ヲ見真大師トス(親鸞聖人) 其長子善鸞故アリテ嗣ガズ 孫如信嗣グ之ヲ第二世トス 爾来如信ハ大師ノ遺言ニ拠リテ関東ニ下向シ 弘安二年奥州白川郡大綱村ニ一字ヲ建立シテ本寺ノ始祖トナレリ 故ヲ以テ京都本願寺ハ如信ノ徒弟覚如ヲ以テ之ヲ嗣グ本願寺三世是ナリ 如信上人ハ京都ヨリ大綱ニ帰ル途中常陸久慈郡金沢村ニ於テ遷化ス 第二世円芸第三世信芸(法名空如) 第四世聖芸(如善) 第五世祐芸(如縁) 第六世寿芸(純如) 第七世遵芸(源如) ニ至ル迄大綱ニ居ル 第八世兼清(如慶) 奥羽ノ乱ヲ避ケ常陸那珂郡大根田ニ移ル 第九世兼乘(如賢) ヲ歴テ第十世兼昌ニ至リ同郡菅谷村ニ移ル 第十一世兼信(如空) ヲ歴テ第十二世兼証(如正) ニ至リ佐竹義宣ノ請ニヨリ寺院ヲ久慈郡久米村ニ移シ年々玄米卅俵ヲ施与セラル 第十三世兼空(如明) 第十四世兼栄(如観) ヲ歴テ第十五世兼智(法名如高)

ニ至リ 義公其由ヲ聞キ歸向斜ナラズ 時ニ兼智ニ唯一女(鶴子)アルノミナリシカバ 義公之ヲ城中ニ引取り養女トシテ 本願寺十四世ノ門主琢如上人ノ二子瑛兼ヲ迎へ之ニ配シ第十六世トス 乃ハチ磐船山ヲ開拓シテ大宇ヲ建立シ 家臣トシテ武士ヲ附シ 門前地町内ニ屋ヲ立テ祝町ト称シ 民戸ノ賦金妓樓及ビ渡船場ノ物成ヲ寺領ニ附シ 御供米トシテ三百石ヲ施与シ 本願寺ノ連枝中本山ト定メラル 瑛兼法名ヲ恵妙院如晴ト改ム 世俗本寺ヲ恵妙院ト称スル所以ナリ 第十七世性兼(芸船院如願)第十八世性晴(諦住院如詮)第十九世遍雄(瑞章院如英)第二十世朗芸(慶俊院如海)第廿一世朗兼(信順院如證) 第廿二世勝芸(順教院如証)氏ノ時ニ当リ 水戸藩内訶ノ為 サシモノ宏大壯麗ナリシ十五間四面ノ本堂モ兵燹ニ罹リテ烏有二婦シタルコソ遺憾ナレ 明治元年旧地久慈郡久米村ニ移リシニ 同七年願濟ノ上歸住ス 同三十三年十月遷化シ 教專院勝秀氏嗣デ廿三世ノ法燈ヲ嗣グニ至レリ

按ズルニ 此境内ニ本ト養福院ト号スル小寺アリシヲ 磯浜ニ移シテ本寺ヲ営マレシナリ

明治十七年仮本堂ヲ建築ス 間口五間奥行八間ナリ

本尊 阿弥陀仏

立 像 二尺二寸 春日ノ作

脇立

聖徳太子ノ尊影 本願寺第十七世直如法主證印

見真太子真影 同 第十五世常如法主證印

七高僧相影 同 第十七世直如法主證印

如信上人真影 但木像 義公ノ作

右木像ハ当寺開基ナルヲ以テ開基堂ニ安置スベキ物ナルヲ 開基堂未設故本堂ニ安置ス

従如上人似影 本願寺第十九世乘如法主証印

現今境内坪数 二千三百七十六坪

願入寺末寺ハ左ノ如シ

常陸行方郡潮来町	西円寺
全 久慈郡太田町	帰明寺
全 同 大子町	願誓寺
全 多賀郡友部村	光円寺
全 全 上田村	道教寺
全 那珂郡菅谷村	正覚寺
全 全 額田村	光照寺
全 同 湊町	西光寺
全 同 平磯町	聴法寺
	天保年中廢跡
	天保年中廢跡

全 同川和田村 報佛寺

全 同 大畑村 命照寺

全 同 沢村 称名寺 天保年中廢跡

境内地末寺

西念寺 正受寺 正安寺 法乘寺 要行寺 林清寺

道場

常陸東茨城郡与沢村 長島喜八

全 久慈郡小島村 梅原孫右衛門

已上末寺ハ本山改正ノ際一般本願寺直末ニ編入セラレ 地中寺院ハ永統ノ目途ナキ
為メ本寺ノ見込ヲ以テ之ヲ廢ス 道場ハ今猶存在ス

義公ノ親書ヲ左ニ掲グ

奥州白河郡大網村願入寺者 如信上人之草創也 正安元年如信還自洛途偶嬰病 暫留
常州久慈郡金澤邑而療焉 明年正月四日寂 遂葬于金澤 爾来子孫奕葉居于大網 文
安中八世孫如慶避国乱而遷居常州那珂郡大根田 至第十世如了移同郡菅谷村 十二世
如正營寺院於久米村 嗚呼如信実親鸞之嫡孫而一宗之正統也 雖然奥常二州本邦之東
偏而大網久米又一州之僻地也 故来詣者常寡施親者亦少 今至如高都十五世 寺院歲
荒堂宇月壞 余傷其嫡流之衰微 而相攸于茨城郡宮田村岩船新造寺宇 施与田園三百
石内分百石永充如信墓所守戸云

延宝乙卯夏五月□日

源光圀朱印拜

如高大上人

獅子座下

兵燹ニ罹ラザル前ニハ鐘樓アリ 鐘ニ義公ノ歌ヲ鐫刻セリ

無二光の御山の鐘の声の内に やかて明けゆく十方の闇

本寺ハ寺格モ宜シキ故ニ 其姻戚モ諸侯ニ多シ 乃ハチ第十九世如英瑞華院ノ室ハ水戸文
公ノ妹峯子姫ニシテ宝照院ト号ス 第廿世如海慶信院ノ室ハ松平大炊頭ノ息女正子ト称シ
第廿一世如證信順院ノ室ハ松平播磨守ノ息女ナリ

本寺ニハ本ト三十二名ノ武士アリ 中ニモ服部藤右エ門 水科新介 加藤右内 駒井書令
ノ四氏ハ義公ヨリ付ケラレタルモノナリ

服部東馬氏ハ藤右エ門ノ子ナリ 少シテ善ク劍ヲ撃ツ 水戸藩ノ指南役浅田富之允ニ従ヒ
水府流ノ奥義ヲ極ム 元治元年甲子八月十六日味爽水門館勢ニ従ヒ湊町ノ敵營ヲ襲フ 先
ズ小川街ヨリ華藏院ニ入ル時ニ 水門館勢ノ中ニ龜山幸介ナル者アリ 銃ヲ担テ先ズ進ム
敵ニ大谷佐四郎ナル者アリ 柄太刀ヲ翳シテ跳リ来ル 幸介銃ヲ捨テ刀ヲ抜カントス 及

バズシテ斬殺サル 住谷惣兵エ(矢倉方勤)ナル者進ンデ佐四郎ト刀ヲ交フ 敵兵群リ来リ
テ佐四郎ヲ援ントス 東馬之ヲ支数人ヲ斬ル 惣兵エ東馬二人ニテ頃刻ノ間ニ二十余人ヲ
斬斃セシハ目覚シカリシ働キナリ 東馬後ニ衆ト共ニ幕兵ニ降ル 事平グニ及ンデ湊町櫃
原神宮ノ社掌トナリ名ヲ知之ト改ム

● 砲台

街ノ東側ニ在リ 弘化年中烈公ノ築ク所ニシテ 湊町ノ砲台ト相對セリ

● 磐船夕照

烈公八景ヲ撰マレタル時ニ 此地夕照ト定メラレタリ 碑ハ願入寺ノ後ロ官林涸沼川ノ沿
岸巖上ノ地ニ在リ 烈公ノ自筆ニテ隸書ヲ以テ巖船ノ夕照ト書セラレタルモノヲ寒水石ニ
鐫刻セラレタルナリ 碑ノ高サ六尺五寸横五尺ナリ

青山 伯卿

波揺蘭若自清幽 海色蒼々暮色浮 匣岸人家烟杳靄 猶留残照在飛樓

藤田東湖

海天雨霽絶纖塵 回首磐山夕照新 娼樓還有離情切 明日開船知幾人

池田衣川

古刹荒涼空断腸 香烟一炷繞僧房 展開山後縈青外 一片残碑倚夕陽

渡邊沖州

一徑入幽寰 巖頭水漩□ 暮天浮柴影 曛暉映青山

鳥歸新樹裏 僧立古松間 三叉潮來落 魚躍拍巴湾

読人しらす

棹さして見し月よりも磐船の 夕日に匂ふもみちはの影

大畑 春国

けふも又浮き立つはかり見ゆる哉 磐船山の夕暮のそら

綿引 聿

筑波ねをさして入日のてり添ふは みのりも高き岩船の山

福地 元近

もみち葉のみなたに泊つる岩船の 帆かけもなかし秋の夕はえ

渡邊 沖州

なかもれんけしき浮き立つ夕日影 磐船山の入相の空

● 教育

明治七年磯浜小学校分校ヲ設ケラレシガ後ニ廢セラレ 明治廿三年私立小学校ヲ立ツ 廿六年ニ町立トナル 貴島政徳氏初メテ赴任セリ 現今ハ大内重遠氏主任トナル 在学生徒 総数六十五人

内 男三十人 女三十五人

● 里正

本街ハ願入寺ノ所領タリシヲ以テ 同寺ヨリ庄屋ヲ命ズルナリ 初メテ命ゼラレタルモノヲ作兵エト称ス 天保年中ニ至リ磯浜町庄屋之ヲ管理ス 元治慶応ノ頃ニ至リテ亦願入寺ヨリ本街ノ人鈴木作重氏ニ命ゼラレタリ 現今ハ磯浜町長ノ管理スル所トナリタレドモ別ニ区會議員アリテ本街ノ事務ヲ処理ス 今其議員ノ姓名ヲ掲グ

中根宗古 渡邊精作 津川善五郎

北浜四郎 山ト半次 鈴木富蔵

渡邊精作氏

渡辺精作氏ハ引手茶屋ヲ業トスレドモ 文雅風流ヲ好ミ 沖州ト号シ詩歌ヲ好ム 情歌ノ宗匠タリ 竹楽房ト称ス 本街ノ旧事ヲ記憶ス 編者モ氏ニ質ス所多シ亦多謝スル所ナリ

● 妓楼

妓楼ハ元禄八年洗濯女トシテ十二戸ヲ許可セラル 後ニ長瀬林蔵ト云フ武士登楼シ酗メ暴行ヲ働ヲキシカバ 祝街ノ少壯輩梯子攻ニシテ終ニ之ヲ捕ヘタリ 此事ニ関シテ七戸ハ断絶ノ処分ヲ受ケ 且ツ妓楼ヘ武士ノ登ル様ニテハ士風ヲ乱ストノ沙汰ニテ他ノ五戸モ営業ヲ差留ラレタリシガ 百方哀願ノ上許可サレタリ 是ヨリ妓楼ハ五戸ト限ラレタリ

成田屋権重ハ五戸ノ一ナリ 頗ル俠気アリ 時ニ小田原ノ城主大久保加賀守ノ家来ニ鳴滝万助ナルモノ同輩浅田某ヲ殺害シテ来リ 本街馬場前街ニ居住シ甘酒売ヲ業トシ居タリ 某ノ二孤浅田紋次郎同鉄之介尋ネ来リ 万助ヲ索メ得テ仇ヲ報ユタリシガ 権重ガ二孤ヲ援テ便宜ヲ与ヘタルニ因ル 水戸藩ニテハ鄭重ニ取扱ヒ小田原ニ送り届ケタリ

鹿島楼ノ創業者ハ文化文政年間ニ鹿島ノ人ニシテ 江戸ニ至リ力士トナリ 鹿ヶ嶋ト名乗

り幕下マデ昇進シタリ 嘗テ湊町ニ来リ興行ス 時ニ湊町ノ俠客檜村小重木戸銭ヲ投セズ
シテ入場セントス 鹿ケ嶋木戸ニ在リテ承知セズ 小重大喝シテ曰ク 汝湊ノ小重ヲ知ラ
ザル歟ト 将ニ珍事ニ至ントス 仲裁スル者アリテ事止ミヌ 鹿ケ嶋漸ク老ヒシ時 五戸
ノ中政子屋ナル者廃業セシカバ 其後ヲ承ケテ妓楼ヲ開キ鹿島屋ト号ス
幕末ノ頃ニ至リテハ成田屋ハ無クナリ 又今文久年間ノ五楼ノ娼妓ノ名ヲ記シテ粹客ノ一
餐ヲ博ス

常磐屋清五郎抱娼妓

常浦(ときうら) 玉年(たまとし) 長キノ 玉ツサ 雲井 千サト 玉サト
イセ山 白山 雲フジ 艶粧 玉村 ヨシ鶴 長ツ
常磐野 桂木 繁浦 皆ギヌ 八ツ橋 玉衣 雲チカ
更科 雲繁 白菊 栄里 綾鶴 山城 玉木
喜代川 福岡 千里 以上三十一名 外ニ禿(カムロ) 十二人ナリ

小松屋弥兵エ抱娼妓

小三 小夜衣 小門戸 小稲 染海 逢井曾(あうそ) 小松野
島之助 逢坂 染山 小以代 初梅 染ノ井 代々花
稲岡 玉琴 初汐 雛吉 小桜 イロ根 初音
菅(スガ) 吉 琴春 以上廿三人 外ニ禿 十人 内芸者 みき とみ

海老屋万右エ門抱娼妓

若梅 清ハシ 琴春 明山 梅ケ枝 稲本 妻琴
繪ニシ 連山 常陸ノ 栄山 尾ノ山 百(モモ)山 若竹
ベ菊 花咲 清山 長喜代 松ガ枝 四方春 松芝
島之助 梅ノ香 色ハシ 以上廿四人 外ニ禿 十一人

白木屋庄兵エ抱娼妓

薄雲 梅ガ枝 薄墨 思羽 長尾 香山 田川
菅原 人元 歌葉 紅梅 雲繁 山城 君扇 小稲
瀧ノ井 仙山 さの松 三代春 長繁 薄村 薫 白梅
梅人 龍田 梅里 思高 以上廿七人
外ニ 禿十二人 内芸者 三名

鹿島屋大吉抱娼妓

琴浪 若浦 静山 八汐 松風 染之助 染山 千代菊
白玉 梅園 喜セツ 八ツ橋 九重 代、丁 二ノ綾 千代重

四方繁 歌川 瀬川 花ノ戸 友鶴 人町 清浪 東雲（しののめ）
松岡 若瀧 千代春 初汐 勝山 清人
以上三十人 外二禿 十人

総計 娼妓ノ数百四十八名 禿ノ数五十四名

内芸者三名

外二芸者 廿一名 引手茶屋 八十二名

現今五楼ノ娼妓ノ数ヲ左ニ掲グ

常磐楼事	北うめ方抱娼妓	十二名
晦日楼	関口秀次郎抱	十一名
鹿島楼	飛田宇之吉抱	十二名
大和楼	山戸友五郎抱	十三名
相生楼	小森利平	八名
計		五十六名

祝町竹枝

大越 松嵐

暮山凝紫雨初収 絲竹声喧楼又楼 翠閣紅房人定後 人間此處小楊州

不夜城中天有別 千燈万燭照眸新 多情泣送多情客 薄倖嬌迎薄倖人

岸边楼接與青波 月照後房幽趣多 少女可憐年十五 凭欄低唱竹枝歌

● 本町ノ関スル軍事

天文元壬辰八月朔 茨城郡小幡城主中務良清大洗ニ詣テ海岸ニ逍遙ス 江戸但馬守道房之ヲ窺ヒ三百騎ニ將トシテ来リ襲フ 良清奮闘シテ死ス 其臣羽田大学増田藤九郎立花甚六之ニ死ス 後ニ居民大洗神社境内ニ祠ヲ立テ、之ヲ祀ル 良清社はナリ

永禄年中甲子 湊小川潮来ノ三館ニ攘夷党ノ屯集スルニ当リ 同年五月水戸藩老市川三左エ門等弘道館ノ諸生ヲ嘯集シテ磐船山ニ屯集シ攘夷党ヲ誅鋤センコトヲ謀ル 已ニシテ市川党江戸邸ニ至リ順公ニ見テ之ヲ請フ 先ズ筑波勢ヲ撃ツ 利アラズシテ国ニ還ル 是ヨリ前ニ攘夷党モ亦市川党ヲ訴ヘン為ニ江戸ニ赴キ小金沢ニ屯集ス 是ニ於テ穴戸侯ヲ奉ジテ国ニ帰ル 市川党ノ為ニ撃退セラレ転ジテ湊ニ入ラントス 伊東辰之介ノ擊卻クル所トナリ 亦転ジテ平戸村ヨリ本町ノ海防陣屋ニ入り勢ニ乗ジテ磐船山ヲ攻ム 守将川上捨次郎曰ク是レ我が死日ナリト 大白ヲ拳テ大ニ酔ヒ衆ヲ指揮ス 衆潰ユ捨次郎之ニ死ス 因

テ願入寺ハ兵燹ニ罹レリ 十六日攘夷党曉ヲ侵シテ湊町ヲ襲テ之ニ拠ル

潮来館ノ渠魁林五郎三郎本町ヲ守ル 諸藩ノ兵幕命ヲ奉ジテ来リ攻ム 大貫ニ陣ス 九月十九日五郎三郎直チニ大貫ニ陣セル佐倉勢ヲ撃チ奮撃突進シテ丸ニ中リテ死ス 其兵祝街ニ退ク 廿一日井田平三郎 朝倉源太郎等五郎三郎ノ僕金五郎等百余人ヲ卒并高崎藩勢ヲ撃テ之ヲ破ル 時ニ水門館勢雨宮鉄三郎 小貫忠三（水戸野史ニ 木村三穂介此戦ニ与ルモノトアレドモ 木村ハ八月十六日ニ銃傷ヲ負フテ治療ヲ加ヘ居レリ 此戦ニ臨ムコトヲ得ザリキ）等佐倉勢ト苦戦ス 朝倉赴ムキ援ヒ大ニ敵兵ヲ破リ退テ本町ニ還ル

其明ニ幕平市川勢ヲ合セ本町ヲ攻メ火箭ヲ以テ本町ヲ焼ク 攘夷党祝街ニ退ク 幕兵大洗山ニ拠ル 攘夷党終ニ湊町ニ退ク 幕兵及鎮党藤田健次郎 戸田藤三郎等代リ陣シ以テ湊勢ヲ攻撃セリ

（この間の「平磯志」を略す）

● 編者懺悔物語リ

慶応元年癸亥 余ハ年再テ二十 水門館屯集ノ攘夷党ニ加入ス 書ヲ渠魁ニ出シテ曰ク此鳥合ノ衆ヲ以テ曠日彌久人心内ニ変ゼン 宜シク急ニ横浜ノ夷館ヲ襲フ可シト 渠魁等怒テ曰ク 我輩忠誠ノ士ノ集ルヲ烏ノ集ルニ比スルカト 大ニ譴責セラレタルコソオカシケレ

闔藩ノ攘夷党南発スルヤ 余ハ水門館勢一番手ノ書記役トナリ従ヒ行キヌ 後衆ト共ニ宍戸侯ニ属シテ国ニ入ル 小幡駅ニ至ル 居民皆奔竄シテ一人ヲ見ズ 小鶴村ニ至ル 水門館ニ属スル人ノ家ノ破壊サレタルヲ見ル 其近隣ニ市川党ニ属スル人ノ家アリ 水門館勢怒リニ堪ヘズ其家ヲ破壊ス 水門館勢ハ先鋒トナリ来リシニ 是ニ至テ水門館勢ハ乱暴ナリ 宜シク後陣トナル可シトノ命アリ 因テ道ノ両側ニ佇立シテ他隊ノ通過スルヲ待チ居タルニ 前駆ノ水戸市台町辺ヘ達セシナラント思フ時 復タ急ニ前駆タルヘシトノ命アリ 因テ又鹵簿ノ両側ヨリ疾行スル中ニ 執政ノ拝謁アリ暫ラク控ヘヨトノ命アルヤ 間モ無ク市川党ヨリ発砲ノ声ヲ聞ク スハ兵端ヲ開キタルゾト槍鞘ヲ撒テ、身構スルヤ 水門館勢ノ大砲早挽キ来レトノ号令アリ 因テ暫時砲戦スルヤ 乍チ目附一騎大声シテ令シテ曰ク退ケト 衆皆敗タルモノト思ヒ総軍大崩レトナレリ

後ニテ聞ケバ 宍戸侯将ニ薬王院ニ成ラセラレントスルニ 衆兵ノ填塞シテ行クコトヲ得ザルニヨリ 道ヲ開クガ為メニ令シタルナリト 去リトハ又武辺ニ暗キモノト謂フ可シ既ニシテ日暮ル 皆其伍ヲ失フ 水館ハ何レニアルト呼ブモノアリ 小川勢ハ何レニアル

ト呼ブモノアリ 若シ此際ニ敵ニ推寄セラレタランニハ亦危殆ナラズヤ

此夜ハ台町ノ坂ノ上リ口ヲ守ラシメラル 因テ坂ノ下ニ篝火ヲ焚キ明ニ徹ス 十二日ニ至リ宣言スラク好文亭へ御成ナリト 既ニシテ雨宮鉄三郎牙宮ヨリ来リ 密ニ湊へ御成ニナルコトヲ語ル 使番森四郎馬ニ騎シテ来リテ曰ク 吾神勢館ヨリ兵器ヲ借りテ夾攻スルノ策ヲ陳ス 聴カレズ此軍必ズ敗レン

水門館勢先鋒トナリ酒門ヲ経テ大野ニ出テ小泉ノ渡ニ至ル 敵兵前岸ヨリ砲ヲ発シテ之ヲ防グ 衆曰ク敵ハ宍戸侯ナルヲ知ラズシテ砲ヲ発スルノミト 乃ハチ侯ノ徽章八角葵ノ馬標ヲ視ス 尚ホ已マズ 使ヲ遣ルモ達スルコト能ハズ

川ヲ挟ンデ砲戦ス 本町出身ノ壮士井坂勝三 川上三千之介等曰ク 前岸ニアルモノハ皆竹槍ノ民兵ノミ 宜シク上流ヨリ渡リ之ヲ駆除シ直チニ湊町ニ入ル可シト 纔カニ小舟一艘ヲ得テ之ニ乗ルモノ六七人 余モ亦之ニ乗リ込ミ柳沢ノ下ニ至ル 敵ノ砲丸両注ス 衆曰ク此寡兵ヲ以テ陸ニ上ルモ継兵無クンバ空シク覆没スルノミ 何ノ益アラン 乃ハチ棹ヲ返シテ小泉ニ帰ル

牙宮ヨリ伝ヘテ曰ク 門奈三右エ門平戸ヨリ渡リ磯浜町ヲ乗取レリト 乃ハチ隊ヲ倒ニシテコレニ趨ク 雨宮鉄三郎水門館勢ノ半ヲ以テ渡場ヲ守ル

此夜諸將岩船山ヲ攻メテ之ヲ陥レ守將川上捨次郎ヲ斬ル 願入寺ハ兵燹ニ罹レリ 光焰天ヲ焦ガシ呼声地ニ震フ 是ニ於テ暗号ヲ勝利ト定ム 十五日ノ夜暗号ヲ舟楫ト改メ 湊ヲ襲フニヨリ水門館勢先鋒タル可シトノ命アリ

鉄三郎棹夫ヲ索メ来ル 棹夫懇ニ辞ス 鉄三郎槍幹ヲ以テ其背ヲ撃チテ曰ク 聞カズンバ突キ殺サント 棹夫即チ命ヲ聞ク 昔シ源義経ガ讚岐ニ渡ル時伊勢ノ三郎ガ舟人ヲ恐嚇セシ例シヲ想ヒオカシクアリケリ

水門小川両勢合シテ三四十人一船ニ乗リ込ミ雨ヲ犯シテ纜ヲ解ク 賊アリ舟中ニ躍リ入ル水門館衆ノ中ニ鹿野鉄之介ナル者アリ 捕テ衆ニ語りテ曰ク 昔シ周ノ武王ノ殷ヲ伐ツ時ニ魚ノ舟中ニ躍リ入りシコトアリ是レ佳兆ナリト

岩船山ノ麓ニ至テ天明ク雨止ム 湊町ヲ望ムニ備無キ者ノ如シ 俄ニシテ敵之ヲ覺リ警鐘ヲ鳴ラシテ大ニ呼ブ 銃砲雨下ス 衆皆槍幹ヲ以テ棹ニ代ヘ 湊町ノ字小川街万右エ門川ノ東ニ上リ船ヲ返シ槍ヲ揮テ締突ス 敵皆披靡ス

万右エ門川ヲ徒涉シ小川街ニ入ル 敵兵走リテ華藏院ニ入ル 我衆之ヲ追ハントス 一人アリ呼ンデ曰ク伏アルナリト 乃ハチ那珂川ニ沿フテ西ニ馳ス 敵兵尾シ来ル 我衆乃ハチ火ヲ放ツテ敵ノ来路ヲ遮ル

余乃ハチ曰ク先ズ反射炉ヲ取テ之ニ抛ル可シ 請フ嚮導ヲセン 乃ハチ小川街ノ半ヨリ右折シテ邸ニ上リ馳セテ反射炉ニ伝キ我衆ヲ招グ 木村進之介ナル者アリ後ヨリ来リ跳リテ反射炉ノ枅形中ニ入ル 余モ亦繼キテ入ル 後ニ六戸侯ヨリ褒賞ヲ行ハル、ニ及ンテ 木村ハ槍一筋余ハ短刀一口ヲ下賜スルノ命アリ 梶原源太ノ二ノ舞セリト後悔シタルコソオカシケレ

既ニシテ我カ衆皆入ル 此頃ノ銃ハ皆火繩ヲ用キシコトナレバ昨夜ノ雨ニ彈藥皆濕ヒ発射スルコト能ハザルニ 敵ハ四面ヨリ銃ヲ発シテ来リ攻ム 我衆徒ニ哄声ヲ発シテ之ニ応ズルノミ 已ニシテ少壯者廿人バカリニテ 槍ヲ揮ヒ表門ノ敵ヲ撃テ之ヲ卻ゾケ 走ルヲ遂テ釈迦街ニ入ル 伏セニ陥リ青野泰蔵ナル者丸ニ中ツテ斃ル、ヲ戸板ニ載セテ昇キ歸ル頃ラクアリテ次回ニ発シタル我衆華蔵院ニ入り（服部東馬氏ノ伝ニアリ）激戦シタル由ニテ敵ヲ逐払ヒ此中ニ入ル 此時ニ水館ノ亀山幸介戦死シ 渠魁木村三穂介腕ニ銃傷ヲ蒙ル

金子勇次郎氏亦入り来ル 雨宮鉄三郎衆ニ紹介シテ曰ク 是レ故孫次郎君ノ令息ナリ宜シク奉ジテ其指揮ヲ受ク可シ 既ニシテ我衆祝町ヨリ直チニ渡レル者アリト見エ 辰ノ口一町目辺ニ火ノ挙ルヲ見ル 衆曰ク宜シク進ンデ資賓閣ヲ夾ミ攻ム可シト スナハチ出ツ先ナル者文武館ニ達セントス

反射炉ノ枅形ヲ留守スル者馳セ来リテ呼ンデ曰ク 二三百人ノ象関戸ヲ渡リテ来ルモノアリ 蓋シ敵ナリ 恐クハ反射炉ノ枅形ヲ拔レント前野健介之ヲ聞キ急ニ其兵ヲ収ム 関戸ヨリ来ル兵ヲ望ンデ曰ク 是レ我衆ニ非ズヤ 旗ヲ掀ケテ之ヲ振フ 彼亦旗ヲ振フ 漸ク近ツケバ乃ハチ眞木彦之進ノ援ヒ来ルナリ

時ニ資賓閣ニ火ノ挙ルヲ見ル 又遙ニ敵將ノ赤地ノ陣羽織ヲ着シタルモノ、走リテ館山ニ行クヲ見ル 蓋シ伊東辰之介ナル可シ 籠禽ヲ脱セリト悔メトモ及バズ 衆乃ハチ徐行シテ文武館ニ至レバ 館ハ敵ノ為ニ破壊セラレ数万巻ノ蔵書ハ井中ニ投ゼラレ サシモ深キ井モ之カ為ニ填塞セリ

余乃ハチ独リ我居宅ニ至リ見ルニ家族皆遁レ居宅ハ破壊セラレ柱ヲ截リテ殊セズ 梶原神社ノ下ニ至リ知レル人ニ遇フ 其人ニ問テ家族ノ潜伏シ居ル所ヲ索メ得テ相見ル 後ニ此時ノ事ヲ想起シ二首ヲ賦ス

小隊飛舸襲敵宮 江流如墨寂無声 曉来宿雨漸收處 認得岸頭幾百兵

一敗一勝正亦奇 凱歌起所閃旌旗 吾妻台上横戈望 方是虎兒奔逸時

反射炉在吾妻臺之地

編者ノ物語ノ為ニ貴重ナ紙面ヲ填ムルヲ憚リ此ニテ筆ヲ閣キヌ

三浜志
終

明治三十四年七月十八日印刷
全 年全月廿一日發行

(定価六拾錢)

茨城県那珂郡湊町八百四拾番地

著作兼 泉彦九郎

発行者

同県水戸市上市下金町七十番地

印刷者 柴宮 正衛

同 所

印刷所 昌文堂

同県同市泉町二丁目三十四番地

著作権所有 川又銀蔵

売捌書林

同県那珂郡湊町百五十五番地

売捌書林 木村 幸介